

# 国際講演会

## —ハノイ・タンロン皇城遺跡の歴史的位置—

- ・日時：平成22年2月1日（月） 16:30～18:30
- ・会場：奈良女子大学 理学系A棟1階 理学部会議室
- ・プログラム：

「タンロン皇城遺跡の建物について」	上野邦一（古代学学術研究センター）
「タンロン皇城遺跡から見える国際交流」	トン・チュン・ティン （ベトナム社会科学院考古学院院長） 通訳：ファム・ティ・トゥ・ザン （ハノイ国家大学講師）

タンロン皇城遺跡はベトナムの首都ハノイで発見された宮殿遺跡です。最下層は、遣唐使として中国に渡り、唐の官人となった阿倍仲麻呂が赴任していた安南都護府である可能性が指摘され、さらにその後の数代の宮殿跡が重複しています。

この発掘調査成果は多方面に及びます。出土遺物は豊富で、そのうち陶磁器には、中国・朝鮮・日本などの東アジアはもちろんイスラム世界から来た物もあります。建物は日本と同じように柱と梁を組み合わせる木造建築で、瓦が葺かれていました。一方で、ベトナム南部にあったチャンパ王国の工人が宮殿の造営に参加したことをうかがわせるレンガも発見されています。これらはタンロン皇城をめぐる国際交流の様相を物語るものです。

トン・チュン・ティン（Tong Trung Tin）氏は、現在ベトナム社会科学院考古学院院長を務められ、ベトナム考古学界を担う代表的研究者です。2004年以來、タンロン皇城遺跡の発掘調査の責任者として、調査を指導されてきました。

奈良女子大学ではこれまで2度にわたり、国際シンポジウムにおいて、氏にその成果の一部を報告していただいております。これらは遺構のお話を中心でしたので、今回は遺物と遺構の分析から、11世紀から数百年間にわたるベトナムと周辺諸国との国際交流についての所見をお話ししていただきます。

また、上野邦一氏もアドバイザーとしてタンロン皇城遺跡の発掘調査に長く携わってきました。建築史の立場から、東アジアと共通するタンロン皇城遺跡の建物遺構について報告します。

- ・主催：奈良女子大学古代学学術研究センター

入場無料 ・ 申込み不要です